

大学から地域の子どもたちへの研究成果発信

－ひらめき☆ときめきサイエンス「本を解剖する」の実施とその意義－

若松 昭子

はじめに

本特集は、2回におよぶ「ひらめき☆ときめきサイエンス『本を解剖する』」の実践記録である。「ひらめき☆ときめきサイエンス」は、正式には「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」という。これは、2005(平成17)年度から独立行政法人日本学術振興会(以下「日本学術振興会」とよぶ)と各大学が共同で実施している、研究成果の社会還元・普及事業である。その内容は、「大学の研究者と最先端の研究成果の一端を、小学校5・6年生、中学生、高校生が見る、聞く、触れることで、学術と日常生活との関わりや、科学(学術)がもつ意味を理解してもらう」¹⁾プログラムである。

日本学術振興会のホームページでは、各大学で実施中、または過去に実施された様々なプログラムが一覧できる。プログラム名をクリックすれば、実施内容や当日の様子も見ることができる。聖学院大学は、2007(平成19)年度に「本を解剖する－メディアとしての書物の世界」²⁾と題したプログラムで応募し、初めて本事業に参加した。当初は単年度のみの実施を考えていたが、学内や参加者からの次年度実施を望む声が大きかったこともあって、2008(平成20)年度には、「本を解剖するvol.2－情報が生まれる場所・情報を生かす場所」³⁾と題したプログラムを企画立案し、再び参加した。ちなみに、2007年度には全国で79大学112プログラム、2008年度では92大学162プログラムが採択され実施された。

特集：ひらめき☆ときめきサイエンス「本を解剖する」

1. プログラムの概要

聖学院大学のプログラム概要を以下に示す。なお、実施担当者の所属等は実施時点のものである。

平成19年度プログラム「本を解剖するーメディアとしての書物の世界」

実施担当：若松昭子(基礎総合教育部教授)

清水 均(人文学部教授)

渡辺正人(人文学部准教授)

河島茂生(基礎総合教育部特任講師)

開催日：2007年11月17日(土)

開催場所：聖学院大学北キャンパス・エルピスホール

募集対象：中学生・高校生30名

平成20年度プログラム「本を解剖するvol.2ー情報が生まれる場所・情報を生かす場所」

実施担当：若松昭子(政治経済学部教授)

清水 均(人文学部教授)

渡辺正人(人文学部准教授)

小池茂子(人間福祉学部准教授)

河島茂生(政治経済学部特任講師)

開催日：2008年9月23日(火)

開催場所：聖学院大学4号館4402・4403教室

募集対象：高校生30名

2. プログラムの企画

「本を解剖するーメディアとしての書物の世界」ならびに「本を解剖するvol.2ー情報が生まれる場所・情報を生かす場所」の両プログラムは、全国の実施プ

プログラムの中では唯一、情報図書館学⁴⁾分野のプログラムであった。いずれも、筆者、すなわちプログラムの実施担当代表者若松昭子が受けた、科学研究費補助金(日本学術振興会による研究費助成金、以下「科研費」と呼ぶ)による2つの研究^{5), 6)}が基礎となっている。これらはいずれも個人研究である。「ひらめき☆ときめきサイエンス」は、科研費による研究成果を子どもたちへわかりやすく発信することを目的としている。その趣旨を厳密に受け止めるなら、本プログラムも若松が単独で実施するのが妥当かもしれない、と筆者は当初考えていた。

しかし、情報メディアとしての「本」の存在は、凡そすべての学問分野において不可欠である。図書館情報学以外の研究者と研究成果を分かち合い、また協働して成果を発信していくことができれば、プログラムにより広がりが見られるに違いないと筆者は考えた。学内の研究者に参加を呼びかけたところ、文学の清水均教授、考古学の渡辺正人教授、情報学の河島茂生特任講師が参加を表明してくれた。こうして、2007年度は4名の研究者がそれぞれの立場から「本」とはどのようなメディアなのかを解き明かした。さらに、翌年度には、教育学の小池茂子准教授が新たにメンバーに加わってくれた。こうして2008年度は、前年度のテーマに新たな要素を加味し、多様な研究分野からの研究者5名による「情報」の解明に取り組んだ。

3. プログラムの実施

プログラムの詳細な計画策定と着実な実施のために、担当職員も含めた会合を何度も持った。大学が通常実施している公開講座や模擬授業とは異なるため、広報や参加者募集の方法なども一から考えなければならず、2007年度は戸惑うことも多かった。しかし、話し合いを重ねるうちに、実施担当教員・職員間で自由に意見交換を行える雰囲気生まれ、ユニークなアイデアが出されるようになった。

例えば、情報システム課の鈴木純職員からは、実験タイムで紙芝居を行う際に、自転車に乗って鐘を鳴らしながら紙芝居親父が登場するのはどうかとの提

案があった。街頭での紙芝居実演というのを見たことがない子どもたちに、1965年ごろ(昭和30年代)の紙芝居の様子をイメージしてもらいたいためであった。また、総務課の浅見幸枝職員からは、当日取り上げる作品『ごんぎつね』⁷⁾の季節感にあわせ、秋の情景に相応しく会場を飾りつけるという案が出された。これらのアイディアのおかげで、日頃は殺風景な講義室やホールが、当日は紙芝居親父が飴と紙芝居を自転車に積んでやってくる町の小さな公園へと早変わりしたのである。このような工夫に支えられ、初対面の参加者同士でもリラックスして講義を聞き、実演を観、物作りができたのではないかと想像する。そうした体験は、「本」を中心に様々なメディア特性を理解してもらおうという当プログラムの目的達成に有効に作用したものである。

2007年度は、対象とする中学生や高校生らの学校の間試験日程等と重なり、参加者は多いとはいえなかった。幸い、関係する教職員や学生の協力もあって、和気あいあいとした雰囲気の間となった。当日のアンケートにも、「楽しかった」「来年もぜひ実施してほしい」という声が寄せられた。そこで、私たちは2008年度の事業参加に向けて、再度企画を練った。

2008年度は、前年度の経験をもとに、準備もより円滑に進められた。継続で実施している他大学の例から、前年度と同じ内容で実施することも考えた。しかし、他分野の研究者が集いあい共に研究成果を発信するという機会は多くない。そこで、私たち自身の勉強のつもりで、「本」という基本のテーマを、「情報」という新たな切り口から取り上げることにした。実施日は、前年度よりやや早めに設定した。結果として、2007年度より多くの参加者を得た。なかには、親子で参加した人、ホームページで企画を知り片道3時間かけて来たという人、勤務先の高校でヒントになるものを得たいという司書教諭など、参加者も多岐に及んだ。参加者アンケートでは、2008年度のプログラムも大変好評であった。何よりも、楽しみながら「情報」について考えることができたという感想が多かったことは、本事業の趣旨に少なからず応えることができたのではないかと喜ばしく感じている。

4. プログラムを終えて

2007年度および2008年度と、「ひらめき☆ときめきサイエンス」事業に参加して、実施者自身が学ぶことも多かったように思う。今回の経験を通して、筆者は、次の2つのことが強く印象に残った。1つは、子どもたちに向けた研究成果発信の難しさ、また1つは、異分野の研究者たちとの交流の面白さである。多くの情報に取り囲まれ、情報が空気のような存在になっている今日、子どもたちにとって喫緊の課題は、情報メディアのそれぞれの特性を知り客観視できる目を養うことである。しかし、子どもたちへ研究成果をわかりやすく伝えるということとは、重要であっても難しいと実感させられた。

図書館情報学の分野における研究は幅広い。コンピュータを駆使する実験系の研究もあれば、古い書庫に籠って中世の写本と格闘する歴史系の研究もある。筆者の研究は、図書館思想を書物史・メディア史の観点から考察するもので、自分ではやや抽象的で扱いにくい分野ではないかと感じている。「実験などを採り入れてわかりやすく研究成果を伝えることができる化学や生物等の分野とは違って、研究成果のどの部分をどのような方法で伝えれば子どもたちに興味を持ってもらえるのだろうか」と、初めは大いに悩んだ。

この壁を乗り越えさせてくれたのは、他の実施担当者たちである。研究者であれば、誰もが情報やメディアと無関係ではいられない。図書館情報学分野の者としては、研究の物理的対象物として「本」を見ているが、他のメンバーは、筆者とは別の形で「本」とつきあう研究者たちである。彼らの協力のもと、図書館情報学、情報学、文学、考古学、教育学の各分野において、それぞれが日頃感じている「本」への視点が集約された。その結果、メディアとしての「本」が多角的に語られることとなった。他分野の研究者たちとの交流は、学際的な刺激や思いがけない発見を享受できる興味深い体験となった。

5. 記録にあたって

本特集は、上述の2つのプログラム実践を記録したものである。各稿は、それ

ぞれの担当者が、当日実施した内容をもとに加筆修正を行った。両プログラムとも、講演の部と実験の部によって構成されている。文章化のやや困難な実験の部では、当日の流れをそのまま活字化するのではなく、行われた実験(実演)の意図をわかりやすく記述することを心がけた。そのため、当日の進行順序とは異なる箇所も一部にはある。また、プログラムの計画と遂行の段階で、実施担当者が用いる語や概念にも学問分野による微妙な違いがあることがわかった。しかし、実践の目的は子どもたちへの研究成果発信であり、大きな支障がない限り、あえて統一することはしなかった。記述では、できるだけ当日の様子を再現するように努め、文体も「です・ます調」を用いた。参加者の一員になったつもりで読んでいただければと思う。

今回の実践に対する客観的な評価や分析については、時間的な制約から本特集に加えることはできなかった。しかし、実践を振り返りそれを次の機会へ活かすためにも、これらの記録は早く公表されることが望ましいと判断し、本特集号の刊行となった。記録はあくまでも記録であり、当日の様子をくまなく伝えられるものではない。また、今回実施したプログラムはそれぞれ一度限りの試みであり、内容・方法等に関する吟味はこれからが本番という思いもある。しかし、大学の研究成果を子どもたちにわかりやすく発信するという取り組みは始まったばかりであり、私たちの実践を紹介する意義は十分にあると思われる。大学から地域の子どもたちへ、研究成果をわかりやすく発信するための一例として、本記録が何らかの参考になればと願うものである。

(本プログラムの実施に際しては、多くの方々からご協力をいただきました。プログラムにご参加くださった方々、ならびにプログラム遂行にご尽力くださったすべての方々に対し、実施担当者を代表しここに感謝の意を表します。)

注

- 1) <http://www.jsps.go.jp/hirameki/index.html> (2009.2.1)
- 2) http://www.jsps.go.jp/hirameki/ht3000/ht3032_seigakuindai.html (2009.2.1)
- 3) <http://www.jsps.go.jp/hirameki/ht20000/ht20043.html> (2009.2.1)
- 4) 「図書館情報学」という名称が一般に使われているが、実施時点での科研費の学問分野の分類項目は「情報図書館学」であった。「情報図書館学」の上位分野名は「情報学」、最上位分野名は「総合領域」であった。
- 5) 若松昭子. 課題番号【16500153】研究期間(平成16－17年)研究課題「20世紀前半のアメリカ図書館思想とその今日的な意義に関する一考察：メディア論から見るピアス・バトラーの書物観とその位置づけ」
- 6) 若松昭子. 課題番号【18500188】研究期間(平成18－20年度)研究課題「分析書誌学の萌芽と発展に関する実証的研究：研究者間学術コミュニケーションを通して」
- 7) 新美南吉『ごんぎつね』いもようこ絵、2005、金の星社、39p.